

「出世景清」考

——景清の斬首——

早川 久美子

一 はじめに

「近松作「出世景清」は、貞享二年（一六八五）に竹本座にて上演された作品で、平家滅亡後も生き延びて源頼朝を討ち滅ぼそうとする悪七兵衛景清の挑戦と苦悩を描く。その五段目である。景清は、頼朝の命によって斬首され、三条縄手で獄門にかけられた。ところが、景清は、依然として牢のなかで生きている。頼朝の一行が三条縄手まで来て、晒し首の景清を見ると、光明赫奕とした千手観音の御首となっていた。清水寺轟坊において、頼朝は景清と対面し、「このうへは助け置き。日向の国宮崎の庄を宛て行ふ」と述べた。そこで景清は、「まことに身にあまりたる御誼の段。生々世々にありがたく、魂に通つて覚え候ふ。かく情けある我が君と知らで狙ひ申せし景清が。所存の程こそ悔しけれと。御前をも打ち忘れ、声を

上げてぞ泣きあたり。」と、屈服の言葉を口にする。

右の景清の会話文は、先学たちによって問題視されたところである。

例えば、荒木繁は、「近松の作品研究『出世景清』（一九五二年）^①」の中で、「舞曲の筋に左右されたということではすまされない。四段目までの景清の形象の英雄性と、五段目の景清のみじめな卑屈さは、あまりにも矛盾する」と述べている。

廣末保は、『近松序説』（一九五七年）で、主人公の「行為」や「葛藤」に焦点をあてる「世話悲劇」論を展開している。彼は、「出世景清」に「近世悲劇への道」を解き明かした上で、右に引用した五段目の景清の会話文を取り上げ、「妥協と屈服の言葉であると言う他はない」と見る。その原因は、「中世的な清水観音靈験譚の侵入」にあったとし、また、そのことによって、以下の問題が生じた

とする。第一は、五段目の葛藤の内容に、四段目の「阿古屋・景清の悲劇は殆んど影響を与えていない」ために、「主題が二つに分かれているような感じの残る」こと。第二に、「方法的にいつても、阿古屋・景清の葛藤と五段目とは相違している」こと。すなわち、「そういう霊験譚をとりこんだ瞬間、その方法は必然的に叙事的な語り物の段階にかえつているのである。阿古屋と景清の事件がより「悲劇」的であり、観客は二人の人間の苦悩を現在進行形のなかで共に分けもつているのに対して、五段目では、観客は一定の距離を置いて叙事詩の世界をきくような状態に置かれる」と言う。要するに、「観音霊験譚の侵入」によって、景清の、屈服と本領安堵は可能となったものの、「近世悲劇の方法は歪められようとしている」と批判的な見方を示している。^③

一方、信多純一は、「出世景清の成立について」（一九五九年）で、右の廣末論文に対して、当時の芸術的祭式的性格から、五段目は景事としておかれたもので、四段目までで劇は終了していると説き、五段目の評価に新しい視点を提出している。^④

景清の物語というのは、先行する舞曲「景清」や古浄瑠璃「かげきよ」によって、あまりに人口に膾炙したものであった。物語にとって、重要な部分をなす観音霊験譚や、それに続く景清の屈服と本領安堵は、近松にしても、欠かすことができない要素であった。一

方、「出世景清」では、観音霊験譚までの、仇敵頼朝の命を狙う景清の葛藤、景清を恋慕う小野姫、阿古屋という二人の女性の苦悩や葛藤を描く場面は、それ自体、完成度の高いドラマを形成している。ゆえに、近松が、五段目において、たとえそれが源氏にとつてめでたく終る祝言や景事であるにしても、それまでの展開を無いことにし、作品の不統一を招きかねないような形で、先行作そのままに霊験譚や屈服の場面を導入していたとは考えにくい。拙稿では、廣末が問題視した観音霊験譚の前の斬首を検討するところから始め、近松が生み出した景清像とはいかなる人物であったのかという点を考えることとした。

二 景清の斬首

観音霊験譚は、景清が斬首されることによって、初めて引き起こされてくるものであった。ただし、それは近松の創作ではなく、舞曲や古浄瑠璃において確認されるところである。古浄瑠璃は、舞曲に準拠した作品であり、筋の展開はほぼ同じである。

舞曲^⑤を確認しておく、景清の捕縛から斬首までの展開は、以下のとおりである。

景清は、大宮司を救うべく自ら繩にかかる。頼朝は、彼を堅固な籠に繋ぐ。籠外の通行人が景清にむかつて、無力を軽蔑す

ると、景清は、観音の名号を唱えつつ牢破りを行う。清水へ詣でた後、「舅に憂き目を見せじため」に元の籠に戻る。斬首は、「其後」のこととなる。頼朝の命を受けた梶原景時の嫡男源太は、「屈竟の兵共を三十余人拵へ、景清を籠より取つて引出し、六条河原にはめいて出、西向きに引つ据へ」る。景清が南向きを座を直すと、源太は、「最期にもなりしかば、心動転し給ひて、西方をさへ知らずして、南方に向かひ給ふか」と言う。景清は、法華経・方便品の一節を引用しつつ、相手を遣りこめると、「はや切り給へ、源大殿」と述べ、潔く首を討たれた。

先学は、先行作においてもそうであるが、景清斬首をあまり重視していない。例えば向井芳樹は、「幸若舞曲「景清」の論——語りものにおける景清像の成立——」で、舞曲「かげきよ」を論じて、捕われの身となった景清は、「逃げ上手」の特技も、個人的な恩義の前に力を失って、ただ断罪をまつばかりの、あわれな身の上になってしまふ。」と見たうえで、「捕われの身となって後の景清の行動は、牢破りにしても、処刑にしても、眼を抉つたことにしても、すべて観音の霊蹟を前提としている」と述べている。^⑥

本作の場合、四段目の最後に牢破りが置かれ、その後再びの牢入り、斬首と展開している。牢破りでは、景清が、牢の前に来て暴言をはく阿古屋の兄、伊庭十蔵に対して、「いで物見せん」と言うのと、

観音に念じて牢を破つて出て、十蔵その他大勢を相手にした。その箇所は、

南無千手千眼、生々世々。一聞名号滅重罪、大慈大悲観音力と。金剛力を出だし、えいやつと身ぶるひすれば。大釘大繩はら／＼と切れてのいた。門取つて押しゆがめ、扉をかつばと踏み倒し、手を広げて踊り出で。八方に追ひまはすは、荒れたる夜叉のごとくなり。むらがりかゝる。若党仲間はらり／＼と蹴倒し。十蔵をかいつかみ、取つて押つ伏せ。背骨も折れよと、どうど踏まへ。

と、ついに十蔵の身体を二つに引き裂くというもので、並はずれた怪力であった。しかし、その後に「いや／＼この度落ちませなば。また大官司や小野姫憂き目を見んは必定と。思ひさだめて」と立ち返り、元の牢屋に走り入る。

問題の景清斬首は、五段目の最初に描かれている。その箇所は、次のように、先行作が描くような斬り手との問答も、景清の潔い態度の描写もなく、甚だ簡略な描写である。

中にも悪七兵衛景清は大事の朝敵重罪なれば。助くるに所なく、佐々木四郎に仰せられ。つひに首を刎ねられ、今は四海泰平なり。大仏供養御聴聞あるべしと、諸国の大名御供にて。南都に御下向なされける。

ところが、捕縛される以前の景清は、平家のために戦って自ら果てる覚悟があったと描く。その覚悟は、次のような詞章によって明らかである。以下に関連箇所を引用し、傍線を付した。

○ こゝに平家の一族悪七兵衛景清は。西国四国の合戦に討ち死にすべきものなりしが。死は軽くして易し、生は重くして難し。所詮命を全くして平氏の怨敵。右大将頼朝を一太刀うらみ。平家の恥辱をすゝ、がんと、落人となり〔第一段・地の文〕

○ 末頼みなき身ながらも。せめて頼朝を一太刀うかゝひ、君夫の恨みを散じ。その後は腹切つて、ともかくにもまかりならんと、空しき月日を送り候ふ。しかる所に〔第一段・大宮司に対する景清の会話文〕

○ このたび畠山重忠東大寺再興の奉行に上るを良きしほと。先づ重忠を狙はんため、我が身を卑しき下郎にしなし。既に間近く付け寄せしが、運強き重忠にて。我等が智略あらはれ。本意なくも討ち損じ。一向に重忠と刺し違へ死なんとと思ひしが。思へば御身がなつかしく。〔第二段 阿古屋に対する景清の会話文〕

四段目の最後のところで、大宮司と小野姫のために入牢した景清であったから、逃亡することはできないが、覚悟のとおり自害して

果てるのであれば、少しも問題がない。または、斬首に処せられるまで生きていたとしても、牢破りをしてのけるなど人並み外れた怪力を備えていたので、斬り手の佐々木四郎と「刺し違へ」て死ぬ、という選択肢もあった。どちらであっても、武士として恥ずかしくない最期を遂げることができたはずである。

第一節で述べたとおり、先ずは、景清の英雄的な活躍を描く四段目までと、五段目との間に隔たりがあると見てきた。しかしながら、屈服するまでの、五段目最初の斬首の描写に、前述したような景清の形象と照らし合わせて、矛盾する点が見つけられるのである。近松の景清には、斬首に処せられるまでに、当初の復讐の意志を曲げるといふような、何らかの変化が描かれているのではないだろうか。仮にそうだとすれば、斬首の意味も変わってくることになる。

三 景清のあくなき挑戦

景清が落人となったのは、頼朝を討ち、「平家の恥辱をすゝ、がんと」ためである。彼の挑戦は、常に孤独なかで行われた。結果的に、景清は挫折し、頼朝に屈服するのであるが、ここではそれまでの展開を確認したい。

一段目で、景清の頼朝襲撃は、三十四度に及んでいたと語られている。景清自身、これまでの襲撃の失敗を反省し、「かう申す景清

は二相を悟り候へども重忠は四相を悟る。」が、その重忠に阻まれたためと判断。先に重忠を討つべしと東大寺へ赴く。その場面の景清を、廣末は前掲論文の中で、「ドラマの発端に置かれた規模の大きさに注目させられるが、このような背景のもとに、人足に身をやつし頬被りして、大勢の番匠の遙かあとから昼餉の櫃をになつて通つてゆく景清を登場させる。晴れがましく雄大な起工式と、人足に身をやつした景清との対照、それは、頼朝の権力に刃向かつてゆく孤独な反逆者景清の悲劇性を、立体的な視覚を通して象徴し、はやくも一種の演劇的情緒をつくり出す」と注目している。東大寺の場では、たしかに、公に対する反逆者景清らしい、殊勝な挑戦が描かれる。しかし、この挑戦も重忠に阻まれて、失敗に終わってしまう。景清は、希望を失う様子なく、「この度は仕損ずとも。この景清が一念の。剣は岩を通さんものをと。躍り上がり飛び上がり、齒噛みをなしてゆく雲の。月の都に上りける。」と、次の機会に望みを託し、ひとまず引き上げることとした。

さて、挫折を知らない景清も、次第に迫る者から、追われる者へとその位置を後退させてゆく。きっかけは、十蔵による訴人であった。追い詰められた景清は、

今宵の訴人は妻の阿古屋、同じく兄の十蔵と覚えたり。おのれ数年の恩愛を振り捨て大欲にふける愚人ども。もつたいたなくも

この御寺に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某が、おのれらが身のためならば、なんでふ命惜しからん。人多く討たせんより、女房兄弟おり合ひて、搦めとれとぞわめきける。

と、大いに恨みの言葉を発した。ただ、景清はあくまでも復讐を果たすべき人間として、私事の都合に左右されるということとはなかった。源氏の討手を散々に蹴散らすと、飛ぶがごとく東路をさして落ちて行く。「逃げ上手」の面目躍如たる場面であるが、そんな景清を作者は、「誠に希代の武士やとさて感ぜぬ。ものこそなかりけれ。」と賞賛している。

ところが、そのような景清も、源氏方に囚われている大宮司と小野野姫を救うため、自分から繩にかかることになる。

舞曲や古浄瑠璃でその場面を確認すると、景清捕縛は、阿古王の刑死の後のこととしている。筋は以下のとおりである。

頼朝の命を受けた梶原が、熱田へ討手を差向けた。景清の代りに、大宮司を都に呼び寄せて投獄。梶原は、大宮司に遺言状を書かせる。その内容は、景清は、今後、信州、および奥州へ下り、味方を率いた上で、頼朝を追討すべし、という指示であった。披見した景清は、指示の通りに行動しようとするが思い返し、大宮司を救出すべく都に上る。清水観音に詣でた後、六波羅に赴き捕縛される。頼朝は、堅固な牢を作り景清を繋ぐこと

にした。

舞曲の景清について、向井は、前掲論文の中で、「人間の義理においてであるところに、景清への同情を聴衆にひきおこさせようとする作者のはたらきが見られる。このために景清は自縄自縛におちいる」と言う。また、「逃げ上手」の特技も、個人的な恩義の前に力を失って、ただ断罪をまつばかりの、あわれな身の上になってしまふ^⑧。ここでの景清には、頼朝追討へ向けて再起すべきか、それとも身代りとなって、大宮司を救出するべきかという選択肢が突き付けられている。ここでの捕縛の理由は、向井が指摘する通り、景清が「個人的な恩義」を尊重したことによるといえよう。

本作では、大宮司が投獄されるということのほか、新たに小野姫が拷問を受ける場面が付け加えられている。また、近松は、舞曲で確認される大宮司の遺言状や、大宮司と頼朝との縁者関係の説明（「大宮司は、頼朝がためには、外戚の祖父にてまじませば、対面あるべし」、大宮司と頼朝の対面の場面を採用していない。本作の景清が、大きな犠牲をはらって大宮司・小野姫を助ける理由は、先行作とは趣が違うようである。

「出世景清」で、大宮司の一家は、今は亡き平家にひたすら忠誠を尽くそうとし、景清に頼朝打倒の望みを託している。それは、次の詞章で確認される。

○ もとより大宮司は平氏重恩の人なれば。ふかく勞り、一人姫に小野姫と聞こえしを景清にめあはせ。子とも婿ともかしづき給ふ志こそわりなけれ。(二段目・地の文)

○ 大宮司聞き給ひ、げに屈竟の時節ござんなれ。かまへて人に悟られ給ふな。急いて事を仕損ずな。片時も早くとありければ、北の方もよろこびて。宗盛公より賜ひ給ふ痣丸といふ名剣を景清に奉り。首尾よくしおほせ給ひなば、一日も逗留なく早く御帰りまじませと(二段目・東大寺に景清を送り出すときの大宮司夫婦の会話文)

○ (景清が姫君を救出するために縛についたのち) 姫君涙を流し、口惜しの有様や。自らや父上は、生きて甲斐なき憂き身なるに。御身は長らへ本望遂げんとは思はず、何とてこれへは出で給ふ。あさましの御所存やと、またさめくくと泣き給ふ。(三段目・景清に対する小野姫の会話文)

景清にとって頼朝を討つとは、「君父の恨みを散じ」(二段目)ることであつたと言う。大宮司は、景清と同様、平氏と深い縁で結ばれていた。ゆえに、大宮司親子を救出することは、小野姫に対する恩愛はさることながら、平家武士としてなによりも全うすべき責務であつたと考えられる。それは、景清が牢に繋がれたあとの自身の会話文で、聖人を引き合いに出し、「されば文王は羑里に捕はれ。

公治長は刑戮にかゝれり。君がため名のため、何ぞかつて憂へんと。観音經の読誦の外。世間口を閉ぢたれば、声聞耳にとざせり。はたらく物は両眼のみ、見る目もかなしく哀れなり。」(四段目)という詞章からもうかがえよう。

先行作での景清は、「個人の恩義」を尊重して縛につくと描いた。近松の景清は、平家武士としての責務を果たそうとして、かえって源氏の縛につかねばならなかつたと描く。近松は、そのような景清を称え、「景清の心底、勇あり、義あり、誠あり。前代未聞の男子なりとて、皆武士の。手本と仰ぎける。」という詞章で結んでいる。

四 屈託を抱える景清

本作、四段目には、二段目に引き続いて阿古屋が登場することになる。阿古屋について考察する前に、まずは舞曲での阿古王がどのように描かれているか、その筋を確認しておきたい。

阿古王は、「二人の若を世に立てて、後の榮華に誇らん」と決心する。六波羅へ訴え出て、報酬を求めた。三百余騎が景清の居場所をとり囲む。景清は、自分の二人の子を殺害し、その後逃走して熱田大宮司の許へ向かう。阿古王は、再度訴人するが、頼朝から、人情にもとる恐ろしい女であるとして、柴漬けの刑に処せられた。

古浄瑠璃でも筋は、同じである。先行作では、景清が阿古王と衝突するということはなく、彼女の刑死によって、精神的な痛手を受けることもない。

本作では、阿古屋・景清の葛藤が描き出されている。それは、荒木によれば、「阿古屋にとっては、景清の頼朝復讐の厚望は無縁の世界である。阿古屋は個人的愛の世界に生き、それを悲劇的に主張する。景清のゆるしの中に己れへの愛のあかしを見ようとして、その要求を破局まで追求する。こうして景清と阿古屋の意思とは、それ〴〵激情的に己れを主張して衝突し、「出世景清」の悲劇のクライマックスを形成する」と言う^④。

荒木説のとおり、その葛藤は作品の中で最も大きな山場を形成している。その中身を詳しく確認したい。

四段目の最初で、新牢に繋がれ、当初の計画を断念せざるを得なくなった景清は、小野姫に対して自分の苦衷を次のように、述べている。「とう〴〵御身は尾張へ下り、後世をとうてたび給へ。これに付けても阿古屋めが心底の恨めしさよ。二人の子供も今ははや殺してや捨てつらん。思へば〴〵景清が運の尽きこそ口惜しけれと。恨みかこちて泣き給ふ。」と。前節で述べた通り、縛ついた原因は、平家武士を自任する景清自身の判断によるものであり、阿古屋に直接の責任はない。しかしながら、牢中の景清は、自分を訴人し

た阿古屋を許すことができない。そこへ、阿古屋本人が二人の子供を連れて登場している。景清は、彼女への不信の念を表し、罵倒する。景清のその会話を次に一部抜き出した。

○ 景清大の眼に角を立て、やれ、物知らずめ。人間らしく言葉をかくるも無益ながら。かほどの恩愛を振り捨て、夫の訴人をしながら。なんの生面さげて、今この所へ来たりしぞ。おのれ指一つかなひなば。つかみ拉いで捨てんものと、齒噛みを。してぞゐられける。

○ や、あつて涙を押へ、やれ子供よ。父がかやうになつたるはな。皆あの母めが悪心にて、縄をも母がかけさせ。牢にも母めが入れるぞ。邪見の女が胎内より出でたるものと思へば、汝等までが憎いぞえ。父とも思ふな、子とも思はじ。はや／＼帰れと叱るにぞ。

○ わごぜがやうなる我慢愚痴の猿知恵を。獅子身中の虫にとへて仏も戒め給ふぞや。汝が心一つにて本望遂げず、あまつさへ。恥辱の上の恥辱を取り。今言訳して妻子が嘆くを不便よとて。日本一の景清が二たび心をかへすべきか。何程言うても、汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子とも思はぬと、思ひ切つてぞあたりける。

廣末は、前掲論文において、その景清の激昂と激昂せざるをえな

い性格に注目し、「所詮、平氏の敗北は定つてゐる。それにも拘らず、頼朝に恨みの一太刀を浴せて死のうとする景清の悲劇的な反抗は、偏執的な強さによつて貫かれてゆかねばならない。」と述べている。^⑩内山美樹子は、「近松のドラマトゥルギー」の中で、右の廣末論文の視点と解釈を認めつつも、景清の言動には、「冷静で情理をわきまえた態度」と「勇士の面目という義理の論理」が読み取れるとし、そのうえで「対等の二性格の葛藤よりも、むしろ近世封建社会における男と女の、裁く側と裁かれる側との間の、断絶を描いた面が強い」と述べている。^⑪

どちらの解釈にも特に異論はない。内山説に付け加えて言えば、二人の「断絶」は、景清側の罵りと拒絶によつて生じたものであった。先に引用した本文に見える通り、景清は、阿古屋を「物知らずめ」と罵倒し、子供たちにも「汝等までが憎いぞえ。」と言う。挙句には、「汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。」とまで述べている。ここで確認しておきたいのは、そのような「断絶」の事態を招いた原因である。牢中にありながら、景清は、いまだに「君夫の恨みを散じ」るべき平家の武士を自任するが、同時にそうであるがゆえの力の限界を感じざるをえないという状況におかれていた。阿古屋を蔑み、断固として拒絶せざるをえなかつた所以は、彼自身の、思うに任せないといった現状把握にあつたと言える。

五 景清の読誦の声

さて、拒絶された阿古屋は、景清の目の前で、二人の子供を殺し、自ら命を断つてしまう。その最初は、母親が兄の弥若を守り刀で殺す。弟の弥若はこれに驚き、牢中の景清に向かって、「いや／＼我は母さまの子ではなし。父上、助け給へやと。牢の格子へ顔さし入れ／＼逃げ歩く。」ものの、父親に反応はない。自分を引き寄せた母親の、「死なでは父への言訳なし。いとしい者よ、よう聞け」との説得に従って刃に倒れる。次いで母親も、子供二人の死骸の上で息絶えた。景清は、その始終を牢中で見守るしかない。

景清にとっては、全くふってわいた出来事であった。さきほどまで、阿古屋を罵倒していた景清であったが、今は、身を悶えつつ「神や仏はなき世かの。さりとは許してくれよ。やれ兄弟よ、我が妻よと、鬼をあざむく景清も。声を上げてぞ泣きあたり。物の。あはれの限りなり。」と嘆き悲しむことになる。その後、十蔵が現われ、妹を殺した景清をのしる。景清は、観音に念じて牢を破って出て、十蔵の身体を二つに引き裂いた。しかし、逃亡できない景清は、元の牢屋へ走り入る。

信多は、前掲論文において、二人の葛藤を取り上げ、「二段目に設定された敵役十蔵によって新しい葛藤が始まり、四段目に於け

る十蔵の末路で脇役の阿古屋景清の葛藤も解決されたわけである。」と見る。そのうえで、本作の構成について、「一段一段が変化とサスペンスに富んだ語り物であり、落人景清が彼の復讐の目的を己が欲から妨げる悪人十蔵と対処し、そのためいろいろの悲劇的事件があるが遂に助命の之恩賞まで賜わるといふ、単純な筋立ての上に組み立てられた作品であり、伝統的な観音靈験譚の上に組み立てられた作品と見るべきではないか」との見方を示している。¹²⁾

確かに、葛藤が解決されるのは、十蔵の末路が示された後のことであると思われる。しかし、十蔵の役割とは何であろうか。十蔵に注目すると、彼は恩賞目当てに景清を源氏方へ訴人した人物であった、本来、「日本一」を自負する景清が相手とすべき人物ではない。振り返れば、景清は、「平家の恥辱をす、がんと落人となり」（二段目）のとおり、どこまでも信条を貫く人物として描かれていた。東大寺では人足に身をやつして戦を挑み、清水寺では身内の訴人にも、ひるむことはなかった。六波羅での捕縛という事態も、さらには、阿古屋に対する悪口雑言も、平家武士を自任するゆえのものであった。葛藤を解消させた時点は、十蔵殺しの後であったと考えられるが、右にのべたような景清の形象を見てゆくならば、十蔵一人を殺すことよって葛藤に解決がもたらされたとは考えにくい。

四段目の最後のところに、景清が十蔵殺しの後に再び入牢する場

面がある。その詞章を確認したい。

いや／＼この度落ち失せなば。また大宮司や小野姫憂き目を見んは必定と。思ひさだめて立ち返り、元の牢屋に走り入り。内より門しと締め。千筋の縄を身に纏ひ、さあらぬ体にて普門品。読誦の声はおのづから。即身菩薩の変化ならんと、皆奇異の。思ひをなしにける。

舞曲と古浄瑠璃の、同場面は次のようである。

舞曲

これより四国、西国へも落ち行かばやとは思へ共、舅に憂き目を見せじため、本の籠に我と入り、心と死をしたりける、彼景清が心の中、何にたとへん方もなし。

古浄瑠璃

是より四国さい国へも、をちゆかばやとはおもへ共、しうとうきめをみせじため、もとのろうに、われと入、心とくをぞ、うけにけり、かのかけきよの心の内、なに、たとゑんかたもなし^⑬

先行する二作の同場面と本作二度目の入牢後の詞章を比較すると、先行作では景清に強い屈託の念があったと描くのに対して、近松の作にはそれが見えず、対比的であるといえる。

また、本作では、さかのぼるが、四段目の最初に、景清は、その

ときも大宮司と小野姫を助けるために、自分から縄にかかり牢につながれているが、その直後の様子は、「観音経の読誦の外。世間口を閉ぢたれば、声聞耳にとざせり。はたらく物は両眼のみ、見る目もかなしく哀れなり。」と描かれていた。その時は、前節で述べたとおり、強い屈託を抱えていることが明かされている。それとこの二度目の入牢後を比較すると、景清が観音経を読誦している点は同じであるが、屈託の有無という点で、やはり対比的な描写になっていることが確認できる。

以上の二つの比較から、本作の「読誦の声はおのづから。即身菩薩の変化ならん」という詞章は、阿古屋と景清二人の葛藤が解決されている、というより、景清自身が屈託を無くしている様子を描いたものといえる。一度目の入牢で、彼が屈託を抱く理由は、自分は復讐を断念せざるを得ないのではないかという現状把握から引き起こされたものであった。それならば、逆に、ここでの屈託のなさは、景清が頼朝への復讐の念から解放されていることになる。ゆえにそれまでとは様子が違う景清読誦の声を聴く皆が、「奇異の。思ひをなしにける。」となるのである。

そのような景清の変化に注目するならば、近松だけが描いた、景清と阿古屋の葛藤、そして阿古屋の自害の意味を見直すべきではないだろうか。

原道生は「時代浄瑠璃における悲劇的特質」の中で、阿古屋の限定的な役割について言及し、「景清と源氏との間の緊張関係に新しい変質が生じて作品が大団円へと至るのは、五段目の清水観音の霊験を契機としてのことなのであり、景清の妻子の死は（小悪党の義兄伊庭十蔵に対する報復やその後の牢破り等の一連の事件をも含めて）、それとまつたく無縁のままに終わつてしまふ出来事にすぎなかつたのである」と言う。そのうえで「作品を貫く最も主要な対立関係、つまり、いわゆる作品の「世界」になに一つ影響を及ぼすこととなかつたものとして構想されているかぎりでは、彼女の行為が、時代浄瑠璃の主人公にふさわしいそれとして、作中に十分に正当な位置を与えられているとは称しがたいだろう。」と述べている。^⑩

原論文で示されたとおり、阿古屋はひたすら景清を恋慕う存在にすぎない。しかし、阿古屋自害の原因というのは、自分は復讐を果たせず、阿古屋に向かつては、「恩愛を振り捨てた」と責めた景清自身にあった。そもそも阿古屋は、自分を訴人するつもりはなかつたのである。今さら後戻りはできないものの、自分のこれまでを省みて号泣し、詫びるしかない。「鬼をあざむく景清」が、徹底的に打ちのめされる場面が描かれていた。その後、何一つ目的を果たしていないまま、景清の声は、皆に「即身菩薩の変化ならん」と形容されるまでになる。彼の変化の原因が何であつたか、はっきりと描

かれているわけではないが、景清と阿古屋の葛藤、そして阿古屋の自害という出来事を、彼が自分の問題として受け止めたことと無関係ではないように思われる。

ともかく、景清は、復讐の念を解消し、その後に斬首されている。観音の霊験によつて復活した後に、彼は頼朝に対して屈服する。屈服した以上、頼朝を狙わねばならぬ事態は避けねばならない。「とかくこの両眼のある故なれば、今より君を見ぬやうに」と自分から眼をえぐり出した。その後は、本領の地日向で、三万三千三百巻の普門品を誦する人生を送るために旅立つのである。

六 まとめ

悪七兵衛景清は、いかにして挫折し、復讐の願いを無くするに至つたか。近松が本作で新たに生み出した景清を考えると、この点は重要である。

斬首刑に処せられるまでの過程は、以下のとおりである。景清は、平家武士として、頼朝への復讐を果たすべく生きてきた。潮目が変わったのは、三段目の最後のところで、源氏方に囚われた大宮司とその娘の小野姫を救うべく、自分から繩にかかったときである。四段目、六波羅新年に繋がれ、身動きのできなくなった景清は、源氏の世で復讐を果たすことの難しさを実感し、強い屈託を抱かざるを

えない。そんな景清の前に、阿古屋が幼い子供二人を連れて姿を現した。彼女は夫を訴人するつもりはなかったと弁明し、許しを乞う。景清は、彼女と子供を頑なに拒絶。阿古屋は、絶望のあまり子供を道連れに自害を遂げてしまう。このふつてわいた出来事によって、景清は強烈な痛手を被っている。牢破りをして十歳を殺し、再びの入牢となった後、皆に、景清の「誦誦の声はおのづから。即身菩薩の変化ならん」と形容されたとする。

「即身菩薩の変化ならん」とは、牢に繋がれながらも、景清に屈託がなくなったこと、すなわち復讐の念を無くしたことを意味する。その後、景清は斬首されている。斬首の箇所は、景清の最期の様子を描くこともなく、甚だ簡略な説明で終わっている。

近松は、五段目に、景清斬首に続き、観音靈験譚による復活、頼朝への屈服、本領安堵までの筋を採用している。先学たちは、景清の活躍を描く四段目までと、その五段目との間に、隔たりが生じているという見方を示してきた。しかしながら、斬首以前に、復讐の願いが無くなっていたと捕捉するとき、景清の形象に大きな矛盾はないといえよう。本作の清水観音靈験譚は、頼朝への復讐のために生命をかけるもその執心から解放され、その後斬首刑を被ることになった景清にもたらされるのである。

注

- ① 荒木繁「近松の作品研究『出世景清』」『文学』一九五二年十月。
- ② 先行作として幸若舞曲「景清」、古浄瑠璃「かげきよ」が存在する。
- ③ 廣末保「近松序説」『近世悲劇への道』未采社。
- ④ 信多純一「国語国文」第二十八巻六号 一九五九年六月。
- ⑤ 舞曲の引用は、『新日本古典文学大系 舞の本』（岩波書店 一九九四年）による。
- ⑥ 向井芳樹「幸若舞曲「景清」の論——語りものにおける景清像の成立——」『帝塚山学院短期大学研究年報』十一 一九六三年十一月。
- ⑦ 注③に同じ。
- ⑧ 注⑥に同じ。
- ⑨ 注①に同じ。
- ⑩ 注③に同じ。
- ⑪ 『国文学』 解釈と鑑賞』一九七一年八月。
- ⑫ 注④に同じ。
- ⑬ 古浄瑠璃の引用は、横山重校訂『古浄瑠璃正本集 四』（角川書店 一九六五年）による。
- ⑭ 『国文学』 解釈と鑑賞』一九七四年九月。

〔付記〕「出世景清」の本文引用は、『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集三（小学館、一九九七年）』による。また資料の引用に際しては、適宜表記を改め、ふりがなを省略した。